



「前向き子育てプログラム」の勧め 子育てはサバイバル？ 親のイヤイヤ、子どものイヤイヤ

子どもと向き合うことは決して容易なことではありません。どうしたらうまくつけ合えることができるのでしょうか？「前向き子育てプログラム」を勧めている澤田いずみ准教授がその秘けつをお教えします。

9月6日、札幌医科大学保健医療学部看護学科、澤田いずみ准教授を招き、福祉教育保健関係機関の研修会を開きました。

澤田准教授は専門家や親を対象にしたセミナーや講演会で「前向き子育てプログラム」のファシリテーター（進行役）として道内各地で専門的な研修指導を行っています。

「前向き子育てプログラム」とは、オーストラリア生まれの親支援プログラムのひとつ。澤田准教授によると、「前向き」とは精神的な前向きさを表すのではなく、子どもをしつける時、「〇〇してはダメ」とネガティブな表現をするのではなく、「〇〇しないようにどうすればいいか？」を伝えることです。

「親支援プログラム」が必要です

現代はインターネットなどを通じて、多様な知識情報を容易に得られるようになりました。半面さまざまな情報が氾濫し、あるいは人によつ

て得られる情報に格差があるため、情報が適切であるかどうかを判断することが年々難しくなっています。子育てについてみると、少子化、核家族化が進み、子供と触れ合う機会が減少し、親、祖父母から自然に受け継がれたであろう育児技術の伝承機会も不足するようになってきました。

子育ての知恵を必要とする場合、核家族化し多様な社会的つながりから切り離されてしまっている母親はネットなどの中にあふれる知識情報の中から、適切だと思われる情報をその都度自分で探し出し、手探りで子育てをしている状況です。親と子のガチンコ対決が生まれているのです。

まさに「子育てはサバイバル」状態。そのような背景から、子育てやしつけに着目して作られたのが「親支援プログラム」です。子育てをすすべての親が孤立しないで、自信を持って子育てできるような環境が望まれているのです。

日本では「母親は皆、子育てができる」という風潮が強いです。しかし澤田准教授は「子育ては本能ではできない」と話しています。日々の子育ては、自分の親、学校の先生、近所の人などから教わったこと、されたことを自然に学習して行っているのだそうです。ということは「子育ては日々の学習の積み重ね」ということができます。

子供の問題行動の背景を詳しくみると、実は家庭環境で改善可能な点が多いようです。一例をご紹介します。

子供の問題行動—その要因

間違っで与えるごほうび

買い物中のお店で「おやつが欲しいためにそれをぐしゃぐしゃにする」一。子供が間違った行動をしている時、それを止めさせるためにおやつを買い与えていませんか？ 子供は自分の行動が親や他の人をコントロールできることを学習してしまうと、そのような行動を繰り返すようになります。

エスカレートの罠

子供のしつこさに負けて、つい言う通りに従っていませんか？ 子供は、行動を激しくエスカレートすれば要求が通るもの、と間違っで理解し、どんどん行動をエスカレートさせていきます。

あいまいな親の指示

多過ぎたり、少な過ぎたり、難し過ぎたり、タイミングが悪かったり、あいまい過ぎたり、子供との距離が遠過ぎたり。良く聞く「ちゃんとしなさい」という「ちゃんと、ってどういう意味？

好ましい行動を無視する

良い行いをして注目してもらえないと、悪いことをする方が親から注目してもらえと思い込んでしまいます。

感情的になって罰する

物を取り上げてしまったり、「あの時もそうだった」など、過去の出来事と思い合わせてヒステリックに叱ったり、感情的になって過重に罰していませんか？

過度な期待を押し付ける

子供にも自分自身にも、完璧にしようと過度な期待を持ち合わせていませんか？

町では、2歳児の親子を対象（おおむね2歳〜2歳6カ月）に「2歳ふれあいルーム」（2歳児相談）を開いています。

計測、問診、相談のほかに親子遊びと心理士の先生による懇談会を実施しています。

2歳ごろのお子さんは、自我が芽生え始め、「イヤイヤ」が強くなります。お母さんは、その都度子どもへの対応に苦慮されることと思います。「子供とどう向き合えばいいの？」「しつけができない」と一人で悩まず一緒に考えてみませんか？ 対象年齢のお子さんを持つご家庭には個別に案内をしています。お問い合わせは役場保健師まで。